



08

あなたと栄仁会をむすぶ情報誌  
Apr. 2012

特集

特集  
対談

# 認知症と 地域医療の これからを考える。



- 宇治久世医師会 地域医療担当理事 門阪庄三先生 × 栄仁会医師による  
特集対談「認知症と地域医療のこれからを考える。」
- 栄仁会の医療と介護の緊密な連携



医療法人 栄仁会

宇治おうばく病院

べるぶ:仏語のVERVE「活気」より



宇治久世医師会 地域医療担当理事  
医療法人 かどさか内科クリニック 院長

門阪 庄三先生（京都府出身・いて座）

早稻田大学理工学部を卒業後、商社勤め、中学校教諭として教員免許を取得。

平成山大学理工学部を卒業後、商社勤務の、千葉校講師を経て30歳で小郡市立医大へ。2001年宇治市平尾台でクリニック開業。宇治介護支援専門員連絡会会長兼任。

# 高齢者を取り巻く地域医療の現状を知る。

お互い大切なのは、医療と  
福祉の顔の見える関係。

うのは、まだ多方面にお願いしている  
という段階で、具体的には議論が煮詰  
まつていかないのが現状です。

**暮らせる仕組みづくりが必要。**

三木 門阪先生は、宇治久世医師会で地域医療担当理事に就かれています。そのお立場とクリニックの医師として地域の高齢者の方と日々触れ合う中から、医療と地域との連携における今日の問題点や、後方支援としての病院に要望したことなど、ご意見をお聞かせいただけますか。

門阪 宇治久世医師会地域医療担当理事は現在2期目を務めさせていただいています。私の最重要課題は、在宅医療をどうすめていくかということ。ご存知の通り、行政側からは介護療養病棟などの廃止や入院日数の短縮がどんどん求められ、認知症患者を含む高齢者はみな在宅でみ

門 阪 三木 まずは在宅医間の連携、それ なことを掲げていらっしゃるのですか。 三木 具体的な目標として、どのよう に地域の現状の中で、地域医療の 仕組みが今とまでは悲観的になら ざるを得ない。じゃあ我々に何かでき ることはないかということで、平成23 年1月、「在宅医療研究会」を立ち 上げました。月に二度10人ほどの有志 の先生方、病院勤務医が3人、開業 医が7人くらいが集まって、1年間討 論を重ね、ようやく一定レベルの枠組 みができました。この春から、より広 範な先生に集まつて、在宅医療部会準備会」を立ち上 げ、いよいよ本格的に走り出そうとし ているところです。

から後方支援病院のサポート体制を築くこと。さらに訪問看護ステーションとの連携、また在宅支援診療所等を数多く作る必要があるので、申請し易い仕組みを作ろう、ということです。在宅医間の連携というのは、私は副主治医制と呼んでいるのですが、小学校区を1単位として、その学区内でキーとなる医師同士がコンビを組み、対応していくようなチームを数多く作る。24時間365日をひとりの先生の頑張りだけで対応するのではなく、チームで動けるシステムを作りたいと考えています。あまりルールを決め込むと動きにくいのでできるだけ緩やかに。後方支援病院のサポートという段階で、具体的には議論が煮詰まっているのが現状です。

**三木** 先生同士の個人的な面識があつて、個人レベルで同意を取り付けても、病院全体としてとなると、なかなかスムーズに運ばないことが多いかもしれませんね。神崎先生は現在おうばく駅前内科クリニックの所長として、地域と密接に向かい合っておられます。その傍ら認知症グループホームの嘱託医などもしていただいていますが、全部ひとりで、というのはなかなかできないことで、よね。連携が組める医師の必要性など、どうお考えですか。

す。しかし家族ハワイに期待するところが大前提の在宅支援は、日本の社会の形態そのものが核家族化や共働きなどによってあいまいになってきており、難しさがあります。さらに開業医の同士の連携には、開業医のレベルアップも必要だと思います。

**門阪** 本当にその通りです。在宅医療を進める基盤が、我々の社会の其同体の中に存在するのか、という疑念は私にもあります。ただ現実的に、仙台や青森等、在宅専門のクリニックを営む先生が数多くおられる地域では、明らかに在宅での看取りが増えています。今後はますますそういう方向にすすんでいくと考えられる以上、先からして仕組みづくりをすすめざるを得ないだろうと僕は思っています。また神崎先生がおつしやるように、在宅医



特集  
対談

宇治久世医師会  
地域医療担当理事

門阪 庄三先生 >

医療法人栄仁会  
神崎 晓郎

理事長  
三木 秀樹  
樋川 毅

65歳以上の高齢者人口は全国で2944万人(平成22年統計局による推計)で、総人口に占める割合は23.1%と人口、割合ともに過去最高となっています。その中で確実に増え続けている認知症患者。病気への理解は広がり、医療や介護の分野でも目覚ましい進歩があるとはいえ、老老介護や独居老人の増大など、在宅支援において深刻な社会問題も膨らみつつあります。今回は「最後まで安心して地域で暮らせる仕組みづくり」を目指し、地域医療や地域のつながりの再生に取り組んでおられる宇治久世医師会 地域医療担当理事、門阪庄三先生を迎えて行われた、枠組みを超えた認知症対応社会に向けて我々がすべきことについての対談の様子をレポートします。

**住民が安心して生活できる  
医療圏を、ともに構築する。**

**神崎** 認知症は他の精神疾患と異なり、正常と異常の混在の時点を本人が自覚し、社会生活を十分営めるレベルからスタートします。ドクターで

敷居が高いのも問題です。患者さんにも家族さんにも、精神医療という抵抗感が強くて、話がなかなかできません。そういうことがうまく運ぶたまでも、認知症のどの時点で投薬を開始するなどの時点で専門医にお願いするというのをきちんと伝えてくれる認知症相談医、もしくは認知症かかりつけ医というような先生を地区の中でつくる必要があると思います。個々の患者さんに、今どんな状態で、今後どうなる可能性があるからこういう治療を早めに行つた方がいきたいと考えています。

**門阪** そうですね、病気を学ぶ仕組みと連携をするという仕組み、どちらも必要ですね。個人的な力だけでは限界があるので、そこを何とかしたい。



宇治おうばく病院  
認知症担当医長  
**樋川 毅**  
(大阪府出身・おうし座)  
1997年京都府立医大卒業後、府立与謝の海病院で修練医を経て当院へ。「無理せず、できることをしっかりやる」が持論。オフの楽しみは2人の子どもと遊ぶこと。お風呂では洗髪も担当。

はなくケースワーカーなどによるサポートがメインとなる初期の認知症と逆転して医療が前面に出てくるレベルの認知症とでは分けて考えなければいけません。そのレベルを共有して見るために、医療従事者とソーシャルワーカーが同じテーブルに付く必要があります。それがなかなかうまく運ばないんですね。

**三木** 医療関係者だけじゃなく地域包括支援センターの職員やケースワーカーも一緒にいます。

**神崎** それも数人単位で。

**門阪** 中学校や小学校区程度の単

位じゃないと、「ああ、あの人」という話にならない。観察をこまめにしてくれる人を確保できるようなサイズの小さい共同体であることがポイントです。

**三木** その共同体を全体的に見て、アドバイスができる人も必要ですね。

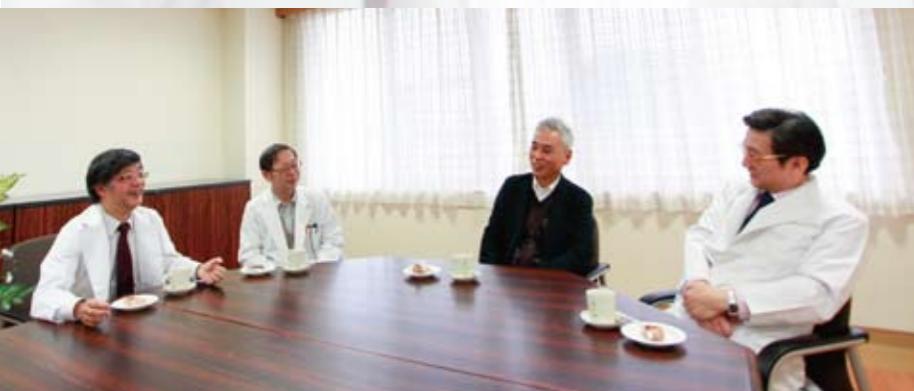
**門阪** そんなネットワークができるば、住民の方は安心でしょう。また、この辺りのケアマネージャーや地域包括支援センターの職員が持つている情報を共有できるようなネットワークもあるといい。ぜひ宇治おうばく病院さん

支援センターの職員が持つている情報を共有できるようなネットワークもあれば、改善される余地はたくさんあると思います。

**三木** 精神科の統合失調症も、今後はほとんど入院は短期間で、なるべく在宅へ移行するという動きになつていくでしょう。いずれは統合失調症の方も先生のような一般開業医の外来に踏み出せませんが、その一步さえ踏み出せれば、改善される余地はたくさんあります。

**門阪** ただければありがたい。なかなか一歩が踏み出せませんが、その一步さえ踏み出せれば、改善される余地はたくさんあります。

**三木** 本日はありがとうございました。



れば、と。二歩一歩積み上げれば、宇治おうばく病院さんを中心いていい医療圏になると思います。

**三木** 宇治おうばく病院は、この春から24時間外来対応可能な認知症救急医療体制を整え、3年後の平成27年度には、より地域の信頼に応えて社会に貢献できる社会医療法人としての形をとることができています。

**門阪** それは心強いですね。期待しています。

**三木** 本日はありがとうございました。



医療法人栄仁会  
宇治おうばく病院 理事長  
**三木 秀樹**  
(愛知県出身・うお座)  
1956年生まれ。1983年金沢大学医学部卒業後、研修医を経て1985年より宇治おうばく病院へ。2005年第9代院長就任。2009年6月より理事長を兼任。趣味は読書。

すね。極端なことをいえば、聴診器ひとつで肺炎を判断しなければならない。人工呼吸、胃ろうの管理、その他本当に総合内科医としての働きが必要になります。しかし、だからやれば我々の技術も向上するよ、という考え方もある。ひとりなら到底無理でも、パートナーシップを組めばやれる、という人が増えてくれば、在宅医の裾野が広がるのでないかと。そんな動きが必要になります。しかしながらやれば我々が甘いとか、楽観的だといわれますが、やらざるを得ないという気がしているんですね。

**三木** そのためにも、診療所の開業

医だけでなく、どう病院と連携をとりながら、スマートな連携ができるかということが大切になりますね。現在ある連携バスもあり実際の連携として活かされているんじゃないですか。

**門阪** 書類上の改良だけではなくなかなか变革は望めません。連携は、やはりお互い顔が見えないと一度顔を合わせて、「ああ、先生はこういうことをやっているらしくやるんですか」と話し合う場を持つことも、在宅医療部会の目的のひとつです。病院のがん治療や難病などで中心的な役割を果たしている先生にぜひ参加いただきたいと考えています。まだあらゆる相談の窓口になっている地域包括支援センターでさえも、病院との連携がうまくいくいい場合が多くあるようです。だからこそ僕は、後方支援をしていただく

医

だけではなく、どう病院と連携をと

りながら、スマートな連携ができるかと

いうことが大切になりますね。現在あ

る連携バスもあり実際の連携として

活かされているんじゃないですか。

門阪 書類上の改良だけではなくなかなかか变革は望めません。連携は、やはりお互い顔が見えないと一度顔を合わせて、「ああ、先生はこういうことをやっているらしくやるんですか」と話し合う場を持つことも、在宅医療部会の目的のひとつです。病院のがん治療や難病などで中心的な役割を果たしている先生にぜひ参加いただきたいと考えています。まだあらゆる相談の窓口になっている地域包括支援センターでさえも、病院との連携がうまくいくいい場合が多くあるようです。だからこそ僕は、後方支援をしていただく

# 地域との緊密な関係を築くために 栄仁会がめざす医療と介護の **連携のカタチ。**

すべてはご利用者さま、  
ご家族さまの安心のために。



宇治おうばく病院  
地域連携室 係長  
**大塚 剛史**  
(兵庫県出身・かに座)



宇治おうばく病院  
地域連携室  
**金森 翔**  
(京都府出身・やぎ座)

## 宇治おうばく病院

コミュニケーションの重要性を実感。

今後ますます認知症患者が増えてくる上で、地域の診療所やクリニックと病院との連携がさらに重要になってきます。現在でも限られた先生ですが、初期段階のうちに診察にくるよう、促してくれる方もおられます。そうすると疾患の流れが見えるんですね。といったケースが少しづつでも増えれば、悪化しても早めに介入する機会が作りやすいのかなと。在宅医療の体制を整えていくためにも、地域とのコミュニケーションを重ねていくことの重要性を感じています。



宇治おうばく病院  
認知症担当医長  
**樋川 賢**  
(大阪府出身・おうし座)



宇治おうばく病院  
外来係長  
**堀井 いつ子**  
(京都府出身・いて座)

## おうばく駅前内科クリニック

地域医療の最前線だからこそ、柔軟に。

宇治おうばく病院と栄仁会の内科的疾患に対する地域医療とサービスをより充実させていくためには、役割や機能の異なる個々のサテライト同士の連携がさらに重要になります。患者一人ひとりの生活環境、病状、退院後の自宅療養生活へのヘルパーの介入、サポートまで一連の流れを見ることが必要だからです。そのためには職員の地域医療に対するモチベーションの向上も必要。クリニックはまさに地域医療の最前線。スタッフとともに柔軟に対応していきたいと思います。



おうばく駅前内科クリニック  
所長  
**神崎 晓郎**  
(岡山県出身・うお座)

## 訪問看護ステーション おうばく

在宅を支援する  
地域の中核に。

身体的ケアに関しては多くの事業所が活躍していますが、初期の認知症、とくに周辺症状により暴力行為のある方やうつ病を有している方などについては、受け入れる事業所が少なく、在宅に戻れないケースも。そのような方々のため、母体が精神科で支援のノウハウを有する当ステーションに向かわれるニーズや役割は大きいと思います。現場では常に「顔を合わせる」「直接電話で連絡を取る」など顔の見える連携を心掛けています。今後は精神保健福祉士や作業療法士などを配置し、在宅支援の中核となるよう、働きかけていきたいと考えています。



訪問看護ステーションおうばく  
係長  
**黒岡 和容**  
(大阪府出身・おうし座)

## デイサービス でんでんむし

いざというとき、  
頼れる場所に。

認知症対応のデイサービスとしてスタート。クリニックと同じ建物の中にあるため、当初は閉鎖的で敷居が高いように思われていたようですが、10年かけ、ようやく地域に受け入れられてきた実感があります。救命救急講習会や認知症サポートーの講演、小学生児童の社会見学受け入れ等さまざまな活動を通じて地域に根ざさうと現在も努力しているところです。診療所、居宅、訪問看護、デイサービスが連携して対応できる利点は大きいはず。地域のたくさん的人にいざというときに頼れる場所として「でんでんむし」の存在を知ってもらいたいです。



デイサービスでんでんむし  
係長  
**南出 ゆふ**  
(京都府出身・さそり座)

## デイサービス おおわだの郷

つながりを深め、  
生活感を守りたい。

利用者さまご自身や、家族の方の介護に対する要望は、今後ますます幅広くなっています。一人ひとりの生活感を守れる介護を提供していきたい。それこそが小さな施設ならではの援助だと思っています。地域との関わりは生活そのもの。毎日の挨拶はもちろん、地域の方への施設の貸し出しや消防訓練への参加等で少しずつつながりができ、施設が認知されつづると実感しています。認知症になっても、最後まで地域で暮らせることを、もっと多くの方に理解していただきたい。認知症への理解を広める役割も担う必要があるかもしれない、と考えています。



デイサービスおおわだの郷  
主任  
**満田 恵子**  
(京都府出身・みずがめ座)



